

中空構造日本の新世紀

FVI 声なき者の友の輪
陣内俊

1982年に上梓された「中空構造日本の深層」において臨床心理学者の河合隼雄氏は、日本の精神性に「中空構造」という特徴があり、その原型は「古事記」などの神話に現れていると指摘した。日本の神話には「タカミムスヒ、カミムス、ヒアメノミナカヌシ」または「アマテラス、スサノヲ、ツクヨミ」などの三神が登場するが、それは二項対立とその止揚という弁証法的な形をとるのではなく、二項両立の間に無為な中心（上記の場合はアメノミナカノヌシやツクヨミ）を置くことで、「中空巡回形式」を取り、「その巡回の中心の空性が体得されるような円環的な論理構造になっている」と指摘した。

さらに河合は、この神話原型が日本人に特徴的な「中心を持たない球体」のような心の構造を生み出していると指摘する。その中空の球面に、思想や神々など様々なものが互いに適切な関係をもちつつバランスをとって配置されている、という心のモデルである。この球体的モデルをそのままに意識化することは極めて困難であるから、しばしばそれは二次元への投影、つまり円として意識される。したがって、その円の中心は絶対的なものではなく、投影角度が変われば（状況が変われば）、中心も変わる相対的なものである（地球儀を見る角度を変えれば、その中心にあるのが東京になったりロンドンになったり、ときには何もない海洋上の一点になったりする様子をイメージすれば分かり易い）。

河合は「無意識の構造」という別の著書において、「球体の幾何学的投影としての円の中心」というこの自我モデルを用いて、「自我に中心があることを前提とする西洋人には理解不能」な現象が説明できる、と言う。たとえば戦時中に「天皇陛下万歳」と言っていた日本兵が捕虜になった途端、米兵に絶対の忠誠を誓う、というような現象があった。「中心のある自我」を持つアメリカ人には、ある種の多重人格的な精神障害が背景にあると考えない限り、この「一夜にして自我の中心が早変わり」する現象を説明できない。しかし、中空の球体的モデルならば、この兵士は「日本軍の一員」から「米国軍の捕虜」へと状況、立場が変わった瞬間、その球体の投影角度が代わり、投影された「自我の円」の中心が天皇から米兵に変ったという説明ができる、というのである。終戦を期に一夜にして軍国主義から民主主義に「宗旨替え」をした戦後の日本国民は世界から驚きをもって見守られたが、これもまた投影角度の変化による自我の中心のすげ替えとして説明可能である。

この話を私が持ち出した理由は、河合のこの分析が、21世紀初頭の日本とそれを取り巻

く情勢を理解するうえにおいても未だ有効性を失っておらず、この論理を下敷きに、現在の社会情勢に引きつけて語ることで、我々をとりまく「21世紀的な諸問題」について新たな「投影角度」の可能性を提案することが出来るのではないか、と感じたためである。

「中空構造日本の深層」が出版された1982年当時、世界は東西冷戦の最中であり、日本国内でもソ連による侵攻に備え「徴兵制を復活」させ、「軍備を拡大」し、「憲法を改正」すべし、という議論が活発であり、それに反対する人々との間で国論を二分する対立があった。約30年後の現在の日本は、「ソ連」が「北朝鮮」もしくは「中国」に変っただけで、ほぼ全くと言って良い同一の構造を保ったまま、過去の再上演が行われている。ヘーゲルの言葉どおり、「歴史は反復する」のである。

1982年当時のこの論争においても、両陣営は今とよく似た主張をそれぞれしているのがあるが、河合が指摘しているのは、「甘えた若者を徴兵制によって鍛え直す」というような主張をするタカ派の陣営の深層心理にある、「中空」に西洋的父性を据えたい、という「父性の復権」という潜在的な願望の存在である。日本の中空構造の空虚な中心に父性の欠落を見、そこに「西洋を模倣した、明治的な父性」を復活させたいという潜在意識にある願いが、徴兵制や軍備拡大となって現れているのではないか、という分析である。

河合は国防については地に足のついた現実的な論議が必要であるとしながらも、このような「父性の復権」の前景化としての「徴兵制の復活論」には警告を発している。その理由は、西洋がもともと父性的であるのに対し、日本社会はもともと母性的であり、そこに西洋的な父性を据えようと試みるなら、それは「母性に奉仕する父性」という過去の戦争中に起きた倒錯を繰り返すことに繋がりがかねないからであるとする。具体的に言うならば、日本の軍隊は中空構造の中心に西洋的父性を模した父性を据えようとしたが、そのメカニズムを駆動させていたのは「集団責任」「土下座の強要」「指揮命令系統の正常な機能ではなく、互いの胸のうちの付度（そんたく）によって事が進められる」などのきわめて母性的な集団の戦いであった。その伝統は戦後にも「一選手の不幸事を全学年の出場停止処分」で償わせる高校野球連盟、「空気の支配によって物事が動くため、事後に責任の所在を特定できない企業や官僚の組織体質」などに受け継がれている。このような現象は個人主義と契約の概念を基礎とする西洋の社会では起こりえないし、理解もされない。

無意識下で父性を希求しているが、実は自身が著しく父性を欠いており、その代償行為として「徴兵制によって若者を鍛え直す」「交戦権がなくて国防ができるか」というような「マッチョな」主張をし、西洋的父性に無謀なジャンプをするのではなく、「個々人の自分の状態を明確に意識化する努力をこそ積み上げるべきであろう。」と河合は言う。河合が例に挙げたのが遠藤周作である。「沈黙」に登場するキリスト像は、西洋が描く父的人物で

はなく、母性を備えた人格としてえがかれている。これを母性優位に過ぎると「神学的に」批判するのはたやすいが、「遠藤はキリストと言う異国の神に対面して、日本人としての自分の存在のなかから生まれ出てきたものを言語によって表現してみせたことに大きい意義があり、遠藤の描き出したキリスト像は日本人にとっては半無意識的になんとなく心の中に持っていたものかもしれない。」と河合は言う。このような言語化の努力こそ、時間をかけて日本人が積み上げて行くべきものであり、安易なジャンプは「中心への権力者の侵入」に対して無防備な、戦前に似た状態を作り出すだけなのではないだろうか。

アメリカの政治学者イアン・ブレマーはその著書「Gゼロ後の世界」の中で、21世紀の世界秩序を中心のない「Gゼロ」と表現した。以前8か国で機能していた主要国首脳会議がもはやその中だけでは諸問題を扱えなくなってきた世界情勢を踏まえ、新興国を加えてG20サミットが2008年に始まったが、事実上ほとんど機能していない。東西冷戦の米ソ二大強国時代の後、フランシス・フクヤマが当時言ったように、アメリカ的民主主義による一極支配、つまりG1の世界が訪れたかに見えたが、中国の台頭、ロシアの野心的帝国主義の復活、イスラム経済圏の拡大、EUの混乱、南米新興国の存在、そして米国自身の失速などの諸要因によって、アメリカによる支配に陰りが見え始めている。パックス・アメリカーナが終焉した後の世界をブレマーは見据え、今後世界は暫定的な「Gゼロ状態」を経て、中国とアメリカによるG2の均衡、もしくは「冷戦2.0」という中国と米国の冷たい対立（かつての東西冷戦と違い、その他の地域は陣営とは関係なく自国の保守主義にひきこもる）という秩序に移行していくかのどちらかになるだろうとブレマーは「予言」した。

アメリカは依然として世界最強の圧倒的軍事力を背景に、GDPにおいても、自然資源、人的資源においても世界の「G1」であることに異論の余地はない。しかし、シンガポールの元外務次官、キショール・マブバニがかつて言ったように、アジアの人間は「100年後も中国はアジアに存在することを知っているが、100年後に果たしてアメリカがアジアにいるかどうかはわからない」。このように、「アメリカのプレゼンス消失による地政学的動揺」は今後も世界各地で増え続けるであろう。

フランシス・フクヤマがその著書「歴史の終わり」で言っているような、民主主義と自由主義経済の盟主として、世界にその「教理」を説いて回る宣教師の役回りに、アメリカは疲弊しつつある。東西冷戦後、イデオロギー対立が終わり、「大きな物語」が失われ世界が多極化したという論調が90年代に流布したが、アメリカが現実的な政策においても内向的にシフトしていくことで、21世紀の世界に生きる人々は思想的にも国際情勢においても「中心なき世界でどのように生きるか」という問いの前に、ある者は困惑し、ある者は懐古主義に陥り、ある者は混乱し、ある者は変化を受け容れられずに適応障害を引き起こす。2001年9月11日の同時多発テロと、その結果による世界貿易センタービルの崩落は、そ

のような 21 世紀的心象風景を予表していたかのように今となっては振り返られる。

「中心なき世界でどのように生きるか」という問いの起源は、20 世紀末の冷戦終結にあるのではなく、19 世紀のヨーロッパにある。科学的知識の進歩によって西洋的キリスト教秩序が以前のような「神話性」や「確からしさ」を保てなくなってきた時期と重なって、ニーチェ、サルトル、カフカなどの思想家や作家により、己の実存の不安と向き合うような「実存主義」哲学となってそれは表出した。これらの作家や哲学者のテーマに共通するのは「神なき世界でどのように生きるのか」ということであり、それまでの「救済の物語」の解体と再構築を試みるものであった。つまりこれらの実存主義的作品群は、「西洋の行き詰まりに対するもがき」が生んだ創造的芸術なのである。これらの思想に最も影響された心理療法家はカール・ユングであり、ユングが東洋思想に深く傾倒したのは偶然ではない。

「若い国家」であるアメリカは、その後 100 年が経った今も、「西洋キリスト教秩序の亜種であるアメリカ的正義」を信じて疑わない無邪気さを保っているものの、夕暮れがひっそりと足音をたてて近づいてきているのを感じている。このひそやかな動揺は「アメリカによる秩序」の恩恵に浴してきた世界諸国に波及し、「遅れてきた西洋の行き詰まり」として感知されている。このような大きな枠組みの中に、21 世紀の日本も位置している、というのが私の見立てである。

このように見えてくると、近年の日本国内における「軍備拡大」「憲法改正」などの議論が、違った角度から立体的に見えてくるのではないだろうか。つまり、思想的および地政学的、双方における秩序の脱構築が世界的な規模で起きているのが現代であり、全体を見ながらそれを再構築しようとする人々、慌てて過去の秩序に戻そうとする人々、動揺のゆえに自らの保身以外考えられなくなっている人々など、様々な反応が「反作用」として引き起こされ混乱状態を呈しているのである。このような各々の内的反応は、外的には政治的スタンスの違いとして投影されているが、その違いが二元論的で奥行きを欠く政治的な言葉のみで語られ、背景に存在する思想的、心理的な多様性が認知されていないために、個別具体的な、たとえば国防についての議論がかみ合わず、空転し、すれ違っているのではないかと思われる。

河合氏と同じく、私自身も、実際の国防については地に足のついた議論が必要だと思う。平和を唱和していればそれは実現するというパシフィズムは現実的でないが、「軍備は国を守る警備会社のようなものであり、強力であればあるほど国民国家という家財は安全だ」という発想は底が浅すぎる。第一に、現代の戦争は国家同士の総力戦ではなく目に見えないテロリズムとの戦いでもあるので、強力な軍備とその行使は、自国におけるテロリズム誘発の危機を高めることとトレードオフである。「日本が憲法 9 条を廃棄し、国家総力を挙

げて兵器の開発に勤しみ、さらに核武装に踏み切り、徴兵制を復活させ兵力を増強させたら」という極論を考えれば答えは明白であろう。そのような日本の国土は今以上に危険な場所になるのは論を待たない。

ことほど左様に、実際の国防の議論に関しては情勢を踏まえつつ冷静かつ慎重な議論が適宜必要である。その一方で、現在の国防と地政学をめぐる議論の背後にある「中心なき世界でどのように生きるか」という問いに関しては、河合の言う「中空構造の自己意識」を持つ日本人は一日どころか、千年の長がある。「Gゼロの秩序」を目の前に動揺する世界で、Gゼロの行き方の作法をもともと知っているはずの日本は、「擬似的な父を中心に据えて回避する」というような方策へ雪崩式に逃げ込むのではなく、もともと持っている自らの行き方を見つめ直し、再定義し、言語化していくことによって、混迷する世界に対する思想的貢献をもたらすことが出来るのではないだろうか。

「アメリカ的正義が行き詰っている」21世紀に日本は「第三案」を提案できるかもしれない。それは足元を見つめ直すことから始まる。近年、「愛国者」を自称する人々が排外的な発言を繰り返すという現象が起きているが、これは足元を見つめ直すことに失敗し、足元をすくわれ完全に転倒していると言わざるを得ない。網野善彦が指摘するように、日本がなぜ今のような「日本の強み」を持っているかという大きな要因の一つは、「純粋な単一民族であったから」ではない。それとは逆に、自らと異質なものを拒絶するのではなく受け入れ、包摂し、練り上げて土着化し、独自の卓越した文化を醸成してきたところに日本の強さの主因がある。我々の祖先は、インド発中国経由の仏教を、日本独自の思想に練り上げ、中国から輸入した漢字を漢字かな混じり文字という世界でも稀有な言語運用にまで応用し、インド発祥の将棋のルールをよりゲーム性の高いものにつくり変え、同じルーツを持つチェスよりはるかに高度な戦略性を持たせた。また明治以降は西洋から近代技術を取り入れ、それを農本主義による勤勉さと禅的な美的センスで世界最高レベルの工業製品にまで昇華した。

日本の土壌はもともと寛容である。その寛容は、河合の言う「中空構造」に起因すると思われる。中心を固定しないゆえに、融通無碍に断面を変えることによって各要素を最適な配置に組み替え、相いれない要素を包摂し共存させる懐の深さ、柔らかさを日本は持っており、それは「Gゼロ後の秩序」を模索する近未来の世界史に資するところが大きいのではないだろうか。対立があったときに「全か無か」という白黒をつけることによって一方を切り捨てる択一論ではなく、近江商人の「三方良し」や大岡越前の逸話、「三方一両損」に表されるアクロバティックともいえる「政治的・高等手腕」を持つのは日本の強みである。山本七平が著書「日本人とユダヤ人」において日本のそのような「政治的天才性」についてユダヤ人の眼から語らせているように、硬直的な契約やルールよりも現実的な譲歩や調

整によって物事を丸く収めていく包摂的な社会は、時に弱みにもなり得るが、それを補って余りある、日本を利してきたところの無形財産である。日本が歴史の中で幾度か択一的な排外性に侵されたときは例外なく、「空虚な中空」に意図的かつ狡猾に侵入した権力者の存在が背後にあるので、その点には常に警戒が必要である。戦国時代以降は豊臣、徳川であったし、明治以降は長州閥や軍閥であった。現代の日本においても「天皇を元首と定め、国民はこの憲法に従わなければならない（憲法の制定者、主権者が国民であることは狡猾に隠ぺい削除されている）」という立憲主義の根幹を脅かすような憲法改正案を提示している某政党のように、中心への侵入を目論見人々はいつも存在する。

中心への権力の侵入を防ぎつつ、このような「寛容の伝統」を保つことが出来たとして、そこから生まれるものにはそれでは、どのようなものがあるだろうか。無制限にすべてを論じることは到底叶わないが、私はキリスト教徒であるので、ひとつの例として、150年前に日本に始まったキリスト教思想に引きつけて可能性を探ってみたい（江戸時代の禁教政策によっていちど連続性が途切れているため、イエズス会によるカトリックの布教以来、という立場はここでは除外する）。仏教が日本に土着化し、鎌倉仏教として真に日本的な思想が開花するのに500年以上を要しているのであるから、キリスト教も真に日本的な開花を見るには、あと数百年を要するのかもしれない。しかしその「萌芽」のようなものだけでも示唆することが出来ればここでは十分であろう。

ひとつは、寛容の概念に関してである。新約聖書の書簡において使徒パウロは、幾度となく寛容を説いているが、そのひとつの背景には多民族の帝国主義的国家であった当時のローマ統治下における諸教会に、民族間の対立による問題が多発したという事情がある。実際、パウロの書簡には全部で14回「寛容」という言葉が登場し、その多くはユダヤ人と非ユダヤ人の間、金持ちと奴隷の間、どの指導者につくかという党派的な差異の間などの身分、人種や信念による分断を諫（いさ）めるという文脈と共に語られている。

寛容に関する聖書の言葉を内面化したとき、それは日本では「相容れないものを包摂する多元的世界」を現すが、西洋では「寛容ならざるものを排除する」という形をとる傾向にある。実際アメリカ国内では、「リベラリズムの寛容」と原理主義的キリスト教徒は摩擦を引き起こしている。つまり、アメリカの「原理的な寛容」は、「絶対的な真理がある」という主張だけを例外とし、それを除いてすべてのものに対して寛容であるという「原理的な相対主義」という歪な形に近づいて行くのである。その結果、アメリカのリベラリズム由来の寛容によって、学校で生徒が個人的に神に祈ることが禁止され、「BCとADの由来はキリスト生誕の前後」という知識が、宗教を教えることになるからという理由で歴史の時間で教えることが避けられ、クリスマスのお祝いを「冬の祝祭」と言い換えるといった、およそ寛容とは相いれない事態に帰結するようなことが起こっている。このような感覚は、

そもそも寛容というような形而上的な概念を机上に並べて議論する必要すらなく、清濁併せ飲み、矛盾する概念を矛盾したままに包摂し統合する文化を身体的レベルで体現してきた日本人にはあまり理解できない（実際、日本の学校ではクリスマスの日には給食にケーキが登場し、七夕には生徒全員で短冊を書いて竹に結び付け、節分には豆まき関係のイベントが行われるが、これらが、公教育にキリスト教やアニミズムを持ち込むことになり、寛容の精神をおびやかすものだ、という議論は聞いたことがない）。これは河合の言う「中空構造の自己意識」と深く関係があると思われる。遠藤の「キリストの母性」がひとつの「土着化」ならば、「中空構造によるやわらかい統合」もまたひとつの土着化ではないだろうか。

もうひとつの表出は、医療や看護等の治療行為における、援助者－被援助者の関係性、およびそこに介在する「病」というものをどのように捉えるかということに関して、現場の実践のなかから生まれる体系知である。極めて日本的あるいは東洋的な、キリスト教的精神の「発現」がそこには見出される。ひとつの実例として、北海道浦河にある「浦河べてるの家」という精神障害の当事者による活動拠点施設が挙げられる。創始者の向谷地生良氏はキリスト教徒のソーシャルワーカーであり、この活動は日本基督教団浦河教会の牧師と向谷地氏が教会で障害者との共同生活を開始したところから始まった。障害者と向き合い、キリストの愛を実践しようと試行錯誤し、凄まじいまでの格闘と数知れぬ失敗を経て、向谷地氏がたどり着いた概念は「『非』援助」であった。

「援助者と被援助者」という硬直した関係性を脱し、互いに病んでいる人間同士が、障害を抱えた当事者の病気と言う触媒によって結び合わされ、相対的に癒し癒されながら病気と共存していく、という思想がそこにはある。彼らは「当事者研究」という、病気になった当事者が自分の病気を研究対象として発表し合う、というグループ療法を実践し、日本各地から見学者が後を絶たないのみならず、諸外国からの注目も集めている。べてるの家の発想法は、問題を引き起こす原因としての「病気」を治癒、克服または排除することによって「病気のない状態＝健常者」に戻す西洋医学的な考え方と一線を画する。むしろ、病気も含めて人間の心身を一種の共生的な生態系、あるいは小宇宙のように見なし、その生態系の平衡状態を適切な落としどころに導くために「手当て」を施すという東洋医学的な発想に近い。入口は西洋的な援助の発想から入ったものが、「矯正」という概念を脱し、「共生」という概念に行きついたのである。

べてるの家とその取り組みは、病気の人から病気を取り除き、「健康な人々で構成される社会」に適応できる「健常者」状態に戻す、という考え方の前提となっている。「何かが出来ないところから出来るようになっていく」という近代思想が脅迫的なまでに追い求めてきた価値体系全体に対する、鋭い批判となっている。向谷地氏は、病気はメッセンジャーであり、それは、「何かが出来るようになる」という右肩上がりの生き方から、「降りて行

く生き方」「右肩下がりの生き方」へとシフトさせるように、という「声」であると主張している。現代医学によって「不治」と宣告された重度の精神障害者たちは、当事者研究によって「現代の預言者」という全く新しい視点と役割を与えられ、輝きを放っている。

同じ「キリストの愛の実践」から始まっている、西洋由来の援助と、極めて日本特有の表出を見た「べてるの家」式の援助（彼らの言葉で「『非』援助」）は、それぞれに異なる角度から光をあてたダイヤモンドのように、その色彩が異なる。「マイナスからプラスへ」「何かが出来ないところから出来るように」という父性的な隣人愛も必要だが、「マイナスを抱きしめる」「何も出来ないことの中に既に価値がある」という母性的な隣人愛もまた人類にとって必要なのではないだろうか。

私の個人的な友人である土畠智幸氏は2013年、北海道札幌市に「生涯医療クリニックさっぽろ」を開院し、人工呼吸器が必要な小児医療の在宅療養支援を行う「小児在宅医療」の先駆的取組を行っている。土畠氏は自身の論文「医学資本論」の中で、これまでの「科学的根拠に基づく医療」に端緒する「医学の権威」または「医者への権威」によりどこを置く医療の在り方がつくりだす医師－患者関係が、「人間としての医師、患者双方の疎外状態」を作り出している」と指摘している。そして医師、患者双方が物象化されない諸個人のまま、相互関係の在り方を共同で構築していくことによる「アソシエーションを基盤とした医療」への「静かなる革命」を提唱し、自らの医療実践によって、その革命の担い手のひとりとして現場に身を置き続けている。「生涯医療クリニックさっぽろ」では、医師が白衣を着ないが、これは当クリニックが、医学や医師による権威によりどこを置くこれまでの医師－患者関係を脱構築し、あたらしい関係性を相互に再構築していくことを目指していく場所であるということの患者と家族、地域社会へのメッセージである。

ここで唐突ではあるが、私自身の話を少しする。2013年末からこれを執筆している2015年夏まで、私は燃え尽き症候群による鬱状態に陥り、通常の世界生活すらままならない困難を味わい、現在も寛解に向かうリハビリの途上にある。2013年までの私は「FVI 声なき者の友の輪」の担い手のひとりとして、「現代社会における隣人愛の実践を、キリスト教会はどのように具現化していくことが出来るか」ということを国内外において啓発し、訓練するとともに、試行錯誤の実践を行っていた。具体的には国内における「聞き屋ボランティア」という無料傾聴ボランティア活動や、福島県におけるソフト面からの災害復興支援、「愛の行動の3ステップ」という実践メソッドの普及啓発、開発途上国における、西洋資本とのつながりを殆ど持たない地域教会や小グループによる愛の実践者たちとの、経済的支援を含む相互関係の構築などがその活動内容であった。このような活動をつづけながら、貧困や疎外の問題も複雑化し多元化する21世紀の社会にあって「声なき者の友」として生きることがどのようなことを意味するのか、迷いつつ自問自答する日々を過ごしてい

た。

2013年の秋ごろから本格的に体調の異変をきたし、12月に燃え尽きによる鬱病との診断を受け療養期間に入った。これまで「声なき者の友」として生きるとはどういうことか、そればかり考えてきたが、自分が「声なき者」となってみて、見える風景は一変した。鬱病というのはその症状に幅や個人による差異が大きいですが、私の場合、文字の角が神経に触る感覚を覚え文字が読めなくなり、対人恐怖によってメールや電話の通知でパニック寸前に混乱し、思考力がないためほんの些細な日常的な決断が出来なくなった。自律的思考を始めるとすべてが自分を否定する方に向かい自殺念慮に取りつかれるため、文字が読めないときはラジオを聞き、文字が読めるようになってからは、起きている間は常に本を読むことで自律的思考を意図的に止める必要があった。私の活動の動機であり源泉であった神との対話は突如完全に断絶し、祈ることは絶望への近道に他ならなくなった。突然「神なき世界」に放り出された、というのが私の実感であり、自分の人生にこのようなことが起こるとはそれまで想像だにすることがなかった。これはキリスト者としての信仰を持ってから18年間で初めての経験であり、生きてきた世界の床が抜け、「聖なる天蓋」が崩壊するような大きな出来事であった。いわゆる「魂の夜」というものを経験する中で、「神なき世界」で、それでも生きようとする人々の声なき声が、私には聞こえたような気がした。

私のこの個人的な「魂の夜」におけるターニングポイントは、「西洋キリスト教由来の父性的な救済の物語」から、「東洋的で母性的な、それでもキリスト的な」愛との出会いへのシフトであった。それはたとえば、病気を「治すべき対象」や「神と自分の間に立ちほだかった障壁」と考えるのではなく、「愛すべき友人」あるいは「病気それ自体が神の恵み」と捉えるというような変化として現れた。「べてるの家」によく似たなこのような発想を真に内面化したとき、「病気がその役割を終えて私から距離をとってくれた」ような感覚を抱いた。実際、そのころから自律的に考え、文章を書くなどの作業が出来るようになり、鬱状態の波は目に見えて回復を見た。

土畠氏の話に還る。2015年4月、私とそのターニングポイントに差し掛かった丁度その頃に、1年半ぶりに友人の土畠氏と会う機会に恵まれた。そこで土畠氏は私に、「障害者は生きているだけで社会変革」と言った。その言葉はおそらく、病気になる前の私にとっても非常に感銘を受ける言葉であろうことには変わりないが、今の私とはやはり響き方に違いがあったように思う。1年半、まともな社会生活をするうえで当たり前のひとつひとつのことが出来なくなり、この病気が果たして本当に治るのかもわからないという、ある意味においては障害者にも似た経験を経た自分には、この言葉は当事者として響いた。

そして、この言葉をヒント、または補助線にして、「自分」「社会（隣人）」「病気」「過去

におきた人生の様々な出来事「援助者（家族、友人、カウンセラー）」などの関係が再配置され、夜空に新しい星座を結ぶようにして、新しい物語が薄ぼんやりと浮かび上がってきた。その物語の全体像を言語として語るにはまだ多くの時間を要すると思われるが、今まで自分が西洋キリスト教由来の近代合理主義的価値観に沿って捨て去り、ときには「埋葬」してきた「弱さ」や「影」や「病」、ときには「闇」の部分こそが、実は自分の創造の源泉であり、ときには愛の源泉でもある、という主要な発見がそこにはあった。それらを「強さ」や「光」や「信仰（と今まで呼んできたもの）」によって乗り越えたり打ち消したり置き換えたりするのでなく、それらも含めて包括的に自己を統合し人生を構築するように、というメッセージを伝えるために、神は私に病気、あるいは試練と言うメッセンジャーをくださったのだという「舞台裏」を垣間見た気がした。

それまでの人生で保たれていた自我の安定した動的平衡状態を破り、あたらしい動的平衡状態がもたらされるためには、このような「創造的破壊」が起こる必要があったのだと今は理解している。再び河合の論に戻ってくると、私の自己と言う球体において「価値なきものや有害なもの」として見過ごされ、ときには排除してきた諸要素を再び統合の中に組み込むために、新たな投影角度を強制的にもたらしてくれたのが病気であった。この場合の「創造的破壊」の中に含まれていたのは、「西洋近代的自我」も含まれる。

西洋キリスト教はその教理の構造上、「救済」の前提として西洋的自我を「必要とする」。それがあればと仮定しなければ、西洋キリスト教的な救済の物語は完成しないからである。しかし、東洋人がもともと持っていない「西洋近代的自我の模倣」へ無理なジャンプを試みるとき、ある種の分裂状態がもたらされるのではないかと私は分析している。「教會的な自我」と、「日本的な自我」が別れ、クリスチャンとしての自分と日本人としての自分の間の自己同一性が保てなくなってくるのである。山本七平が「日本教キリスト派」と言ったことの含意は、「西洋近代的自我の模倣」によって「自らの西洋的な、あるいは西洋に過剰適応した片側半分」だけが救済に預かり分裂した日本人の姿ではなかろうか。

病気によって体験した「創造的破壊」とその後の「神なき状態」を経て私は、河合の言うところの球体モデルによる自己でありながら、なおかつその自己をそのまま包摂するような救済の物語の可能性について考えるようになった。たとえばローマ書 8 章 28 節の「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」という聖書の言葉があるが、病気になる以前とは違う意味合いで私は捕えるようになった。以前は「益」という到達すべき目標や状態が存在して、それにとって一見マイナスかに見えるようなことも含めた「すべてのこと」をその「益」という状態に近づけるために神が用いたり変換したりしてくださる。という読み方をしていた。それは「災い転じて福となす」というような概念

にきわめて近く、たとえば事業に失敗したが、それによって得た人脈によって想定していなかった成功を手にした、というような物語である。実際これまでに、複数の教会の牧師がこの文脈においてこの聖書の言葉を解説するのを聞いたことがあったし、いくつかのキリスト教関係の書籍の中でもそのような読み方が補強されていた。がしかし、今はすこし違う意味を持ってこの言葉は私に迫ってくるのである。「マイナスを含めすべてのこと」というところまでは同じだが、「益」という言葉が持つ意味が、ある特定の「素晴らしい状態や能力の獲得」や「到達目標の達成」、あるいは「病の克服や挫折からの復活」を指すのではなく、むしろ全体としての「星座」のようなものとしてイメージされている。つまり、「成功」「善」「希望」などと共に、「病」「傷」「挫折」などを含めすべての「星」が、その「益」という包括的な状態（星座）の完成のために必要不可欠である、というのが病気を経た私にとって真実となった「新しい意味」である。ひとことで表すなら完全性から全体性への移行、と言い換えてもいいかもしれない（この場合の両概念は互いに相反するものではなく、互いに補い合うものであるから、私はここで完全性や西洋的合理主義を否定しているのではない）。

これは、「健康」という目標を達成するために病気という障害を排除するという西洋医学の発想と、病気を含めた「小宇宙としての人体」を適切な均衡状態に近づけるという東洋医学の発想の差異に極めて近いものがある。病気という嵐による漂流の結果、このような「物語性」に流れ着いたのは、私が「択一による切り捨て」に陥りがちな西洋人ではなく「相容れないものを矛盾したままに包摂する伝統」を有する日本人であったことがひとつの要因だったのではないかと自己分析している。このような人体観や人生観、あるいは「オルタナティブとしての物語」は、大きく敷衍して考えるなら、「Gゼロ」後の多元的世界における人間関係や社会関係、国際関係のひとつのヒントになり得るのではないかと私は思っている。

今も回復途上にあり、当事者のまま私はこれを書いている。「声なき者の友」の連帯を生み出そうという試みは歓迎されざる病によって「声なき者のひとり」になる、という狭く暗い谷底の道へと繋がっていた。現在はその谷底に片足を置きながら、この谷底が何であったのかを言語化しようと試みている。そして願わくは、「隣人を愛する実践」の日本的表出の萌芽がこの道の先にひとつの花として咲いているのを見つける日が来るのを期待して、今回は筆を置く。

2015年6月27日
愛知県蒲郡市にて